

荷風全集

第十九卷

荷風全集

第十九卷

岩波書店

昭和三十九年 五月 八日 印刷

昭和三十九年 五月 十二日 發行

荷風全集第十九卷

定價 六百圓

著 者 永 井 壯 吉

發 行 者 岩 波 雄 二 郎

發 行 所

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
株式會社 岩 波 書 店

目次

西遊日誌抄	一
西遊日誌稿	五
斷腸亭日記卷之一(大正六年)	六
斷腸亭日記卷之二(大正七年)	八
斷腸亭日記卷之三(大正八年)	二五
斷腸亭日記卷之四(大正九年)	二五
斷腸亭日記卷之五(大正十年)	一八七
斷腸亭日記卷之六(大正十一年)	二九
斷腸亭日記卷之六(大正十一年續)	二五
斷腸亭日記卷之七(大正十二年)	二六一
斷腸亭日記卷之八(大正十三年)	三〇七

斷腸亭日記卷九（大正十四年）	三二
----------------	----

後記	四五
----	----

西遊日誌抄

西遊日誌は余の米國及び佛國にありし時の日記なり。元より人に示すべきものにあらず。示したりとてまた何の興味も無きものなるべし。余この兩三年病よからず去る頃大石國手に問ふに餘命の程幾何なるやを以てす。國手の曰く君元來身健かならざるに若き時夜遊びに耽りたれば露の冷氣深く體內にしみ入りて遂にこの病を發せるなり。今よりして攝生の法を盡すとも事既におそろしくは常命五十年を保ち難からんと。余元よりかくあらんと兼てより覺悟せし事なれば深くも驚かず、唯其の日より暇あればそ等家の内取りかたづけ、いつ死にても人に迷惑かけまじと身のまはりの始末をさ／＼怠りなきのみ。この頃春風日にまし暖く瘦衰へし病軀も立居自ら樂になり行くものから或日書庫の棚取片付けんとする折不圖西遊日誌四五冊あるを見出しかゝるものは焼捨つるに如かずと直ちに後園に持出でしが梅花風に從つて雪と散り來る梢に折から鶯の聲頻なるにぞ物焚く烟立昇らば可憐の鳥や驚かんとそのまゝ樹下の石に坐し日記のところ／＼讀返し見るに感慨忽ち禁ぜず、薄暮迫り來るも猶卷を掩ふ事能はず。今はなか／＼燒きもすてられねば後日人の迷惑となるべきやうの記事を抹殺してもとの如く書庫に收めぬ。

西曆千九百三年

明治三十
六年

九月十七日 木曜會の諸子余の爲に離宴を清水谷皆香園に開く。此夜恰二十六夜に當る。

九月廿二日 郵船會社汽船信濃丸にて横濱港を發す。余の行を送らるゝもの小波先生春浪漁史渚山湖山葵山其の他二三子なり。秋陰雨ならんとす。

十月五日 人の話には中秋は今宵なりといふ。月の曆持たねば定かには知りがたし。此日午後甲板に出づれば遙に山影を認得たり。此悦び譬へんにもなし。事務長の話には今夜加奈陀のヴィクトリヤ港に着すべしとの事なり。手紙あまた認むる中早くも夜となりて一聲の太き汽笛と共に船は港に入りぬ。されど檢疫濟まぬ爲め一夜を沖合に明かす事となれり。此時天次第に晴來りて玲瓏たる明月茫々たる江灣を照す。前方にはヴィクトリヤ港の燈火天上の星と相亂れ月中異郷の山影は黒く怪物の横るに似たり。嗚呼余の身は遂に太平洋の彼岸に到着せるなり。

十月十九日 天氣好かりし故タコマの市街と其の公園を散歩す。街の靜なる事は殊に余を喜ばしめき。公園に入れば車馬の聲いよゝ遠く草は尙青く柔に生茂りたれど木々の梢は半黃ばみて早くも蕭條たる初冬の眺をなしたり。首を回らせば邦人タコマ富士と呼ぶなるモントレニヤ白雪を戴きて雲間に聳ゆ。風光頗佳。

十月廿四日 舍路港^{シヤトル}に赴き知る人を尋ねんとて午前九時過電氣鐵道に乗る。途上の風景旅愁を慰むるに足れり。牛馬羊豚幾百頭となく野飼にしたる牧場の眺望、さては悲しき森林をもて蔽はれたる山谿、四顧茫々たる平原等盡く故郷に於ては見る事能はざる大陸の風景なり。十一時に近き頃舍路港に達す。

西曆千九百四年

明治三十七年

一月五日 亞米利加に來りてより余が胸裏には藝術上の革命漸く起らんとしつゝあるが如し。近時筆を執れども一二行すら満足には書き能はざるは蓋此の如き思想混亂の結果たらずんばあらず。余はゴーチエーの如き新形式の傳奇小説を書きたしと思ふ念漸く激しくなれりと雖も未だ其の準備十分ならず徒に苦悶の日を送るのみ。余は從來書き來れる言文一致の形式につきても亦大なる不満を感じ出せり。身海外に在るが故にや近頃は何となく雅致に富める古文の^{あぢはひ}味忘れがたく行李を開きて平家物語榮華物語など取出し獨り爐邊に坐して夜半に至る。

一月十三日 薄倖の詩人アランポオの詩を読む。夜半燈を吹いて眠らんとするに大雨瀧の如く屋を打つ。夢屢驚き覺まさる。

一月十九日 大に雪降る。白皚々たる異域の山水眞に別様の風趣あり。此日春浪の書を得たり。

二月九日 雪また降る。新聞紙日露戰爭開始の電報と共に旅順港外に於ける露艦沈没の記事を掲

ぐ。

二月廿六日 米國近刊の小説 The Heart of Hyacinth (お蘭の心)を一讀す。閨秀作家オノトワタシナの著す處日本の松島を舞臺として英國の孤女を描ける可憐の戀愛小説なり。さして傑作といふにはあらねど文章清楚にして情趣まゝ掬すべきものあり。日本を舞臺とし日本の風俗を描きたる點に於て余は過半の好奇心をもて愉快に二百餘頁を一日にして讀み終へたり。

四月八日 自轉車に乗り町はづれの深林を横切り道の行くがまゝにサウスタコマと呼べる一村落に出でたり。廣漠たる牧場の景殆余をして恍惚たらしめぬ。

四月九日 昨日見たる牧野の景色眼に浮びて忘るゝ事能はざれば午餉を終るや再自轉車を走らす。牧場の草は既に夏らしき太陽の光に照され天鵝絨の如く輝渡れり。綠陰暗き森の梢には嘗て聽きたる事なき鳥の聲さながら人をして夢現の仙境に在るの思あらしむ。道のほとりに「アメリカンレーキまで十哩」と立札したるを見更に自轉車を走らすれば牧場を行盡して松の深林に入る。林間に湖水あり。風光宛然一幅の水彩畫たり。歸途牧場の唯中にて日暮れんとす。一農家に入りて水を乞ひ携へたる林檎と焼パンを食りつゝ家に歸る。

四月十三日 暑さ夏の如し。西大陸の氣候ほど不思議なるはなし。三月の半には屢雪降りしを旬餘にして忽ち此の暑さに逢ふ。午後涼風を迎へんとてタコマ公園に赴けば杏桃林檎の如き果樹の花今を盛に咲亂れたり。綠陰の青草に横臥して讀書獨夕陽の來るを待つ。

四月十四日 雨。暮寒再び人をして爐邊に近寄らしむ。シエンキキツチが作ハニヤを読む。

五月五日 黒田湖山二六新聞戰場特派員となり朝鮮より書を寄す。

五月十四日 曉起自轉車を走らしてオリンピア港に遊ぶ。タコマより十七哩なりと云ふ。歸途は自轉車を内海通の小蒸汽船に載せ薄暮タコマの波止場に着す。

六月廿七日 故國より送來れる新聞雜誌は齊しく齋藤綠雨の計を傳へたり。余は其の傳を讀みて誠に人事ならぬ悲しみを覺えたり。綠雨が生涯の不幸は彼自らの性格のなせし處なりしと。あゝ江戸狹斜の情趣を喜び味ひたるものは遂に二十世紀社會の生存競争には堪へ得ざるものなる歟。

九月廿二日 去年の今日横濱港を去りしなり。客裏一年は忽過ぎぬ。

九月廿三日 余は遠き以前より自敘傳を作らん事を思ひつゝあり。此地に來りてより創作意の如くならざれば此を機會に自敘傳の稿を起さんかと思ひ參考の爲めにもとまづトルストイが自敘傳幼年少年の著を次第に讀み始めぬ。

九月廿五日 秋も漸く暮れ行かんとす。街頭の樹木朝夕雨の如くに落葉す。故園の秋は蟲の音と月の光とに詩の如く美しかるべきを此地にはかゝる自然の詩歌絶えて無ければ唯來るべき冬を待つべく日毎夜毎寂寥と憂鬱の情とを増し行くのみ。

十月八日 聖路易市萬國博覽會に赴かんとて愴惶旅装をととのへてタコマを去る。

十月十日 目覺むれば列車は落機山の險崖を上らんとしつゝあり。モンタナの高原に日暮る。

十月十三日 終日ミスシツピイ沿岸の沃野を走り夜八時聖路易市に着す。辻馬車を雇ひ一旅亭に入る。疲勞甚しく殆ど倒れんとす。

十月廿四日 カアクウツドと呼ぶ小村落の一農家に移る。舍港より同行せし人々も既に四散し此の地に殘るものは余一人となりしを以て市中の喧騒を避けんが爲め聖路易市の旅館を去りしなり。この村は町よりは十六七哩も離れたる林間の一村にて牛の聲鶏の鳴く音いと長閑なり。余はいはれなく心自ら樂めり。

十月三十日 長閑なる秋の日なり。空日頃にまして好く晴れ春の如き心地す。博覽會場の喧騒にも飽き果てたれば獨り郊外の林間を歩み茫然としてミスシツピイの大河に對す。夕陽オークの紅葉に映ずるさま得も言はれず。

十一月九日 夜來の雨尙止まず空は灰色の雲に蔽はれ風肌^{はだへ}を切るが如し。カアクウツド一村の黃葉盡く地に落ちぬ。冬は來れるなり。

十一月十六日 人に勧められてミシガン州なるカラマヅと呼ぶ一村の學校に入る事に決心したり。余は元來南方の生活を愛するが故にミスシツピイの流に従ひて南に下りルイヂャナの大學に入らん事を欲せしなり。彼の地には今も尙佛蘭西人多く移住し日常其國語を用ゐる由聞及び是非にも行きたく思ひしが風土健康によろしからざればと人々切に止むるにより已むを得ず北に向へるなり。

十一月廿二日 カラマヅに着す。此地は寒氣甚しく夜は殆ど骨も凍るかと思はるゝばかりなり。

來るべき一月二月の寒氣を思ひやりて余は輕々しくかゝる寒國に來りし事を悔い心甚樂します。

十二月三日 連日雪嵐烈し。初めこの地に來りし時は寒さに堪へざりしが一日二日と早や半月ばかり過せし今日となりては稍寒さにも馴れ、衣香扇影うつくしき都會の夢も漸く心より消失せて靜寧極りなき雪ごもりの生活却りて樂しくなり行けり。

十二月十六日 氷點以下の寒氣は余の初めて經驗せし處なるが其れと共に故郷にては見る可からざる寒國の景亦頗佳麗なるを知り得たり。雪皚々たる曠野のはてより光なき太陽悲しげに上らんとする時或は雪積りし深林に月光の蒼然とさし込みたる時、殊に余の心をチャームするは短き冬の日の正に暮れなんとする頃雪に埋れたる靜なる街路に櫓を馳する鈴の響を聞く事なり。この鈴の音を聞く時は身は恰も露西亞小説中の人物なるが如き心地するなり。

十二月廿八日 短篇小説「岡の上」を脱稿し得て木曜會に寄す。

西曆千九百五年

明治三十八年

一月二日 旅順口陷落の報あり。

一月廿七日 家尊郵船會社の處用を帶びミネソタ號に乗じて太平洋岸の舍路に來りしが數日前再び同船にて歸航の途につきたりといふ。書簡の終に七律一首を錄せらる。

幾從二入海 閱二波瀾。無_レ定身蹤愁更酸。來又倉黃歸又急。別何容易會何難。

寸書未^レ盡平生意。兩地空違骨肉歡。湖上天寒宜^三自重^一。老懷偏願一家安。

三月七日 暖し。夜圖書館より歸る時我國にて云ふ「春雨」の如き小雨音もせで積れる雪を潤す。枯木のかげなる人家の燈影うつくしく漏れ聞ゆるピアノの響をぐろに一家團樂の光景を想像せしむ。客愁禁じがたし。

四月廿三日 天氣よし。學校の岡には駒鳥つどひ來りて春を歌へり。午後獨歩岡を下り青草茂る牧場に出で小流の邊に佇立む。村娘日曜日の晴衣着て若き男の腕によりつゝ歩めり。我は一人去年見たりし太平洋沿岸の春を思ひ浮べ旅の月日のいと早きに驚くのみ。

五月十二日 この地の素封家何某氏の舞蹈會に招かれ夜深けて歸る。此の折打眺めたる郊外の夜の景色は云はんと欲して云ふ事能はざるものなりき。半月はおぼろにかすみ樹木は暗然として嵐の雲の蟠るが如し。此の闇の間に一點二點夜深けて起きたる人家の灯を見る。四顧寂として風死したり。余は斯の如き夜のさまをば屢ツルゲネフの小説中にて見たるが如き心地せり。幾分の恐怖と幾分の恍惚相共に交りて何とも知れず心打亂るゝ夜なりき。

五月十三日 昨夜見たりし夜のさま如何にも云ひがたければ黄昏の光消去る頃再び郊外の岡に登り年古りし解の根がたに腰を下しぬ。廣き草原を前にしたる彼方一帶の深林は昨夜見たりし如く霞み渡れり。されど夜尙淺ければ燈の光も數多く遠くよりピアノ弾き歌唄ふ女の聲夢の如くに流れ來るなり。余は默然として心憎きまで艶なる此の初夏の夜を打眺めぬ。他日米國田舎の風景を描くべ

き創作を思立つ事あらば余は將に此の夜の光景より筆を起さんぞさま／＼思に耽りて時の移るを忘れたり。

五月廿二日 晚餐後牧場を横ぎる鐵道の線路に沿ひて歩む。小流のほとりの柵に腰かけて休ふに夏草の香高く空氣の清涼なる事胸も自づと打開かるゝ如き心地す。夕暮はいとも靜に小山の半腹に立ちたる村落を蔽ひ折々遠く子供等の笑ひ戯るゝ聲聞え來る。あゝ忘れがたき夕なり。

五月廿八日 村の南方に聳えたる丘陵に登り行く事一二哩ばかり。州立の癡狂院あり。此あたり樹木殊に鬱蒼として栗鼠多く怪しき聲して梢より梢を飛廻れり。暑き日なれど老樹の蔭に休へば涼風面を撲ちて心地よし。見渡す高原の面は大なる波浪の如く起伏し新緑滴るが如き果樹園あり。野飼の家畜横はる牧場あり。高原のやがて險しき坂となりて盡くる谷間には製造場人家の屋根小さく見え、地勢は更に高まり行きて再び丘陵をなす。茫漠たるこの高原の眺望は輝渡る初夏の太陽に照され宛然パノラマを見るに異ならず。

六月十五日 學校此の日を以て暑中休暇となる。ペンシルベニヤ州山間の一小市に勉學せる今村子を見んが爲め夜八時八分の汽車にてカラマツを去る。予は此の秋學校開始の時再び此の地に歸り來るや否や。若し歸來らずとせば八個月間の客愁を託したる牧場の草果樹園の花に對して餘所ながら永遠の告別をなさざる可らず。さらば。可憐なるカラマツの村よ。

六月十六日 寢苦しき車中の夢より覺むれば列車は正にナイヤガラ大瀑布の畔を過ぎつゝあり。